

2019. 3. 17. 受難節第2礼拝式説教

聖書：マタイによる福音書17章1-9節

『主イエスの変容』

聖書には超自然的な出来事がたくさん記されています。超自然的というのは、一般的に言えば、奇跡と呼ばれるような出来事です。例えば旧約聖書で言えば、出エジプトの時に海の水が二つに分かれて、イスラエルの民がその間を歩いた、という奇跡。新約聖書であれば主イエスが湖の上を歩いたとか、七つのパンで数千人の人がおなか一杯になったとか。これらはまさに超自然的な出来事です。しかしそれらの個々の奇跡もさることながら、そもそも神さまの存在、神が天地を創造されたとか、わたしたちを愛し生かしてくださっているという神さまの存在そのものが超自然的です。超自然「的」、というより超自然です。中でも神の独り子イエス・キリストが人となってこの世にお生まれになった、ということは超自然のきわみと言っていい出来事です。当然、超自然なのですから、わたしたちの理性とか、知性も自然と言えば自然の一部ですから、それを超え出ているのです。だから、わたしたちの理性とか知性で掴み取れるようなもの、把握しきれものではない。ここまではいいと思うのです。わかると思います。しかし、では聖書に示されている超自然というものが理性とか知性に反しているか、というと、そうではない、と思うのです。

理性に反するものであれば、信仰によって生きるということは理性や知性を放棄にするもの、ということになってしまうのですが、実際には、信仰に生きることによって、いよいよ人間の理性や知性を豊かに用いる、ということにもなるのです。

神さまが生きてわたしたちに働きかけ、神の独り子をこの世にお遣わしになったこと、その独り子が十字架にかかり、復活し、神の御許にあって、今も生きて働いておられること、それはわたしたちの理性や知性で捉えられるものではない。十全に理解するなどということは不可能です。

ところが、不思議にも、わたしたちは神の存在、神の働き、主イエス・キリストの十字架と復活のまことを何らか受け取り、感知し、感謝し、その恵みの中にある自分を受け取ることができる。それがまさに信仰と呼んでいるものです。そして信じることは、先ほど申し上げたように、信じることの中で理性や知性を用いて、神のことをさらに豊かに知ろうとする、イエス・キリストのことを理性や知性をも用いて知ろうとする、そう

いうふうに関連していくのです。

今朝朗読された聖書箇所は、主イエスが3人の弟子を連れて山に登り、その山で主イエスの姿が変容した、変貌した、という箇所です。弟子たちの目の前で瞬く間に変容し、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなり、モーセ、エリヤといったすでに地上の生涯を終えた人と、語り合いを始めたというのです。まさに天上の光景を見るが如く光り輝くキリストを見たのです。さらに天からの声が聞こえ、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者。これに聞け」、と神の声が鮮やかに聞こえた。これはまさに、今申し上げた超自然の出来事です。姿が一瞬にして変容したことも、死んだ人との語りも、わたしたちの自然の中にはないことです。でもわたしたちは、このような出来事を自分が納得できないから、理解が及ばないからと言って心配する必要はない。わたしたちの知性を超え出ている出来事です。

しかし、ここでキリストが変容し、神の声が聞こえたということは両者が一緒になって何かを、それもとて重要なことを示そうとしておられる、ということが伝わってくるのです。

この聖書箇所の前後を見てみると、16章のところでは、主イエスが受難の予告をされる、場面があります。ご自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け十字架に向かって歩いていく、受難予告をされています。そして今日の聖書箇所の直後でも、人の子も、人々から苦しめられることになる、と再度受難の予告をされる。つまり今日の聖書箇所は受難予告に挟まれるようにしてあるのです。

キリストがこうした受難予告を繰り返し語るのは、これが自分の根本的な使命だ、と受けとめておられるからです。わたしがこの世に来て、この世で歩むのは、一人一人の罪を背負い、その罰を一人一人に代わって受け、一人一人が神の赦しといのちに生きるためだ。十字架への道は、わたしの根本的な使命だ、それを弟子たちに伝えようとしたからです。

十字架は、端的に苦しみを受けることでした。苦しみの中に死んでいくことでした。だから、それは情けない、力ないものでした。弟子たちも十字架の前で怖くなって逃げだし、十字架の主イエスの無残な姿を見ることそのものを避けました。十字架は誰が見ても美しいものではないし、無残なもの、醜悪なものです。

とすれば、今日の聖書箇所のキリストの変容、光り輝く姿と、十字架にかかっている

く姿が、コントラストのようにここであらわになっているのです。なぜ主イエスは変容されたのでしょうか。なぜ神は、ここであらためて、これはわたしの愛する子、わたしの心に適うもの、とあらためて言われたのでしょうか。おそらくそれは、この光輝くいわば栄光の主とは、十字架にかかっていくキリストに他ならない、ということでしょう。十字架にかかっていく無残で、見るに堪えない姿の主イエス・キリストこそ、まことの栄光に輝く救い主だ、ということです。つまりこの二つの姿は、明と暗という二つの姿なのではなく、一つに重なり合うものだということです。十字架こそが、神とキリストにとって、まことの栄光だ、ということです。山に連れられて行った三人の弟子たちは光り輝くキリストを見て、単純に、率直にうれしかったのだらうと思います。このまま、光り輝く、力に満ちた王さまのようなキリストであってほしいと願っていた。ペトロは受難予告した主イエスを諷めたのですから、十字架なんかなくて、この栄光に輝くキリストであり続けてほしいと思っていたのです。まさしくパウロが言うように、十字架につけられたキリストはユダヤ人にはつまづかせるもの、ギリシャ人に愚かなものなのです。けれども、十字架につけられていくキリストこそが、まことの栄光に輝く救い主だ、ということこそがここで語られていることなのです。

弟子たちはもちろんこのとき、そのことはまるで受け取ることはできなかったと思います。主イエスが十字架にかかる姿を見て、あの時のあの光輝く姿は何だったのか、そう思ったかもしれません。けれど、彼らは復活した主イエスに出会い、十字架も、復活も、神の大きな恵みの業だということを信じる者とされたとき、三人の弟子たちは、この山上の変容を、何度も思い出したのではないか、と思います。そして思い出すたびに、十字架にかかったと主と、あの光輝く主とが、不思議にも、一つなのだということを受け取ったのではないか。それはまさに信仰による受け取りなのです。

キリストと、神とがそのような光景を見せてくださった、聞かせてくださった、そう受けとめていくようになったのではないか。キリストが変容したということは超自然な出来事です。しかし、弟子たちはその中に神の大きな働きを受けとめていった。十字架は確かに苦しみです。痛みです。しかしそこには神の人間の救いへの意志と、それを自分の使命とされたキリストの愛が、強烈な愛が充満しています。この愛がわたしたちには与えられている。そしてそのような十字架にかかる主こそが栄光のキリストなのです。弟子たちはそのことを信仰において受けとめていった。そして信仰において受けとめることによって、弟子たちも実は変容していくのです。それは光り輝く顔になるという変容ではないかもしれませんが、キリストの愛において生きる者になる、

という変化、変容です。

東方教会にはわたしたちとは違って、礼拝堂の中にイコンと呼ばれるキリストや聖書の物語を描いた絵、聖画がかけられています。そしてその絵の前で祈り、その聖画を通して神に祈りをささげる伝統があります。そのイコンの題材として多く選ばれているのがキリストの変容の姿なのだそうです。わたしたちには聖画の前で祈るという習慣はないのですが、今日の聖書箇所を読んでその祈りの姿に少しだけ触れるような気がしました。キリストが変容されて、栄光の姿をお見せになる。その姿を仰ぐたびに、十字架に向かうキリストを重ね見て、神の大きな、豊かな恵みに感謝し、神を賛美する、そのような祈りへと導かれていったのではないか、と思うのです。

D a t a : 受難節第2主日礼拝式説教

讃美 : 前303、後503

新生教会礼拝堂